

巻 頭 言

技術指導の強化を望む

藏 知 毅

畜産の振興が叫ばれてずいぶん年月が経ったようである。特に構造改善事業の進展に伴い、畜産はますます重要性を加えて来た。このためにいわゆる畜産新人が続々と現われて来たが、その大部分の人々の考え方が、あれもこれも大した利益にならない。人々が喧ましく云うからまあ「畜産でも」やってみようかという、俗に言う「でも」付畜産である。したがって技術的にもまことにお粗末である。特に養鶏・酪農、肥育のようにかなり高度な飼養管理に技術を要する部門の場合でも、ほとんど勉強もしないで、大規模な経営に踏み切る人が多い。特に協業経営等の場合にこのケースが多い。その結果あまり良い成績が出ないで失敗でもすれば、まるで指導者の責任ででもあるように云われるのである。

今日ほど技術指導の大切な時はないと思うのである。たとえ「でも畜産」であっても、一度畜産経営に踏み切った人達を、失敗させないように導いて行くのが指導者の責任である。今日までの畜産指導者の多くは獣医師であり、診療が主であって、経営なり、飼養管理の指導をしてきた人は少ない。しかし第一線で活躍している人はまことに多いのである。

県の関係では農林事務所、家畜保健衛生所、農業改良普及所等の職員があり、その他に総合畜連・共済連・経済連・畜産会等の職員から、町村、農協等の職員と技術者は多いのである。地区によってはこれ等の関係職員の連絡協議会があり、お互に横の連絡をとりながら、農家の指導が行なわれているところもあるが、大部分の地区はこの横の連絡が不十分であるし、自分の職場にとらわれ過ぎて、片寄った指導が行なわれている場合も多い。又県の段階での話し合いが末端まで徹底しない嫌いもあるようである。

その辺に問題もあるし、農家の不満も出てくるわけである。

この様な判りきったことが、いざ実行となると思うようにならないのである。しかし指導者がもたもたしておれば迷惑をし、損をするのは農家であるし、農家が失敗すれば畜産の発展など思いもよらないことである。家畜頭数が少ない場合は問題も少なかったが、頭羽数が伸び、地域が拡大されるにつれて、問題も重大化して来るのである。

今年は特に皆様方の御理解を頂き、横の連絡を密にし、一貫した指導ができるようにし、農家の方々に御迷惑のかからないようにしたいものである。